地域と教育を考える

An Essay Concerning the Educational Imprecations of Local Community

小　柳　正　司
（地域文化学科）

キーワード：遺跡、公民館、地域活性化、村を育てる学力

１．古代遺跡から見えてくる地域の現状

昨秋、雲南市にある加茂岩倉遺跡に行ってきた。休日にもかかわらず訪れる人はいない。おかげでビジターセンターの人からじっくりお話を聞くことができた。まずはセンター内に掲示されている遺跡周辺の大きな航空写真のパネルの前に案内された。係員の人が「これを見て何か気づくことはありませんか」と問うので、「山ばかりで、遺跡は谷あいにあるんですね」と答えると、実は今は山ばかりになっているように見えるけれども、このあたりはかつては谷筋から周辺の山あいまで田畑が広がり、集落も点在していたのだと説明してくれた。出雲市の荒神谷遺跡の方から山あいを縫うように街道が通じていて、人々は山間部に棚田や畑を切り開き、毎日荷物を担いで山道を上り下りしながら農業に従事していたのだというお話だった。千数百年もの間、そうやって命をつないできたのだと。命をつないでいく。これこそ「教育」の営みの根本だ。いいことを教えてもらったという気持ちになった。

さて、遺跡を見学した後、近くの大岩を見に行くと、草刈りをしている地元の人がいたので、ビジターセンターで伺った矢櫃（やひつ）神社跡に行きたいのだが、どの道を行くのかと尋ねると、「本当に行くんですか」と言う。「山道だから結構きついですよ。大丈夫ですか」と言うが、「ええ、まあ、とにかく行ってみます」と答えると、「本当に行くんですか。じゃあ、せっかくだから案内しましょう」と言ってくれた。作業を中断させて申し訳ない気持ちだったが、お言葉に甘えて、藪が生い茂る山道を草や小枝をかき分けながら 20 分ほど一緒に登って行った。確かに案内なしでは無理だった。小汗をかいてやっと矢櫃神社跡にたどり着くことができた。次頁の写真のような大きな岩がご神体で、岩倉の地名はここから発したのだそうだ。昭和のころまではこの脇に神社の社（やしろ）と神楽殿があって、神職も常駐していたというが、いまは石垣が少し残っているだけだった。かつては例大祭の日に夜神楽を地元の集落の人たちが舞い、近在から大勢の見物人が集まり、われわれがよじ登ってきた参道の脇には屋台のお店が立ち並んだそうだ。そう言われて周囲を見回してみるが、今ではまったく想像もできない。

図 1　矢櫃神社跡

案内していただいた人は 60 歳前後で、私と同世代なので、昔話に会話は弾んだ。私も子ども時代、家の近所に岩をご神体とする神社（岩室神社）があって、社殿の裏にしめ縄を張った大きな岩があり、矢櫃神社跡の大岩にそっくりだった。本当はそこに入ってはいけないと禁じられていたにもかかわらず、悪ガキたちはそこに入り込んで秘密基地遊びをしていた。でも、古来日本人は子どもを神の依り代と見ていたから、神様は悪ガキにも寛容だったはずだと、後になって知った。昭和 30 年代、祭りの日には旅回り一座の芝居小屋がたつほどの賑わいを見せていたその神社も、今は訪れる人もなく荒れ果てている。

こんな話をしながら、山道を下る帰りの途中、彼の人は「自分の家は 20 年ほど前までここにあったんですよ」と指さして言った。見てもただの藪と竹林しかない。私は一瞬絶句したが、話によれば、この山道の周辺にかつては何軒か家が建っていて、今はみなさん、山を下りて狭い平地に移り住んでいるとのこと。しかし、上のほうにはまだ 1 軒住み続けている家があって、そのうち TV 番組の取材が来るのではないかと地元ではうわさしているそうである。

実は矢櫃神社跡周辺の山林一帯には、かつては綿栽培の畑が広がり、住民は低地の田んぼとの間を行ったり来たりしながら農業をしていたそうである。だが、かつての畑は山林に覆われてしまい、人が住んでいた形跡など跡形もない。平地の田んぼも、おそらく自給米用に残してあるのだろう。あとは宅地や空き地（いわゆる耕作放棄地）になっている。人間が手を加えなければ、かつての耕作地はあっという間に元の原野に戻ってしまうことを目の当たりに感じた。

ここで先のビジターセンターで見た航空写真のことを思い出した。係員の人は、このあたりの山間部一帯は掘れば必ず何かが出てくるとおっしゃっておられた。加茂岩倉遺跡自体、農道の工事で、本来ならまっすぐ道を作るはずの所を、わずかな田んぼを避けるため、わざわざ道を曲げて作ろうとして、ショベルカーで山

を削っていた所にたまたま出てきたんだそうである。日本の古代史を書き換える大発見もきわどい偶然によるものだとは驚きである。「それくらい何でも出てくるはずですよ、この辺は」と係員の人は苦笑していた。とにかく、加茂岩倉遺跡周辺一帯は今は山ばかりだけれども、かつてはそこに古代以来人々が住んで、生活を営み、祭礼をおこない、芸能を楽しんでいた。それが昭和の終わりころから少しずつ人が住まなくなり始め、山あいの田畑は放棄され、古代以前の元の山林原野へと戻っていこうとしている。過疎の現実と古代の遺跡とが妙につながってしまった。

２．公民館は地域住民の学校だ

年もおしつまった 12 月 20 日、島根町の公民館に出向いた。有名な加賀の潜戸のすぐ近く。潜戸は一度訪れているが、地元の方々が集うイベントを見学するのは初めてだった。島根小学校 6 年生全員による「町の幸福論発表会」である。会場に入ると「こんにちは」と子どもたちの元気な声が大きく響いた。「町の幸福論」とは、わが町を活気ある楽しい町にするにはどうしたらよいかを論じるものである。用意された 30 脚余りの椅子は地元の住民の方々などでほぼ埋まった。小学生が町の将来についてどんなことを考えたのか、地元のみなさんは興味津々。公民館長さんが喜ぶほどの盛況ぶりだ。

「加賀まるごと博物館」の F さんが総合司会を務め、発表会そのものは児童二人の司会で進行した。最初に児童代表のあいさつがあって、これがまた堂々としているので、びっくりした。会場は全員かしこまって聞いている。

続いて、１班から４班まで、４人ずつ、うち２人がスライドを操作し、２人がスクリーンの前で口頭発表した。発表の内容は、国語科の授業の中で教科書に出てきた全国各地のコミュニティデザインの事例を取り上げ、インターネットなどを使って具体的な取り組みの内容を自分たちで調べなおし、それらを参考に島根町のコミュニティデザインを提案するというものだった。例えば、1 班は、神奈川県三崎町がおこなっている海を活かした地域おこしイベントの取り組みを参考にして、海の美しさの点では全国どこにも引けを取らない島根町の美しい海を活かして、無人島探検ツアーの企画を提案した。これには会場を埋めた地元住民の人たちもかたずをのんで聞き入った。発表後の質疑応答の中では、この提案を実現するための具体的な条件やアイデアの逆提案がいくつか住民の側から出された。小学生が大人を導き出したのだった。ここがこの企画の肝だなと思った。

１班に限らず、続く２班、３班、４班の発表でも、大人たちの意表を突くような提案が次々と出てくる。もちろん、実現はかなり無理と思われるものもあるけれど、子どもたちが島根町の自然や文化を取り上げ、大人たちを巻き込んでそれらの価値を一堂で再認識できたことが何よりの収穫だったように思う。

さて、この島根町の「町の幸福論発表会」はささやかな企画ではあるが、いろいろと考えさせられる点が多かった。

先にも触れたが、この企画は子どもが提案し大人がそれに反応する形になっている。企画者の公民館長さんの話では、この形式は今回が初めての試みだそうだ。これまでは地域の神社とか史跡とか言い伝えの場所とかを子どもたちが巡り、公民館長さんをはじめ地域の人たちからいろいろとお話を聞いて地域を知る企画が中心だったそうだ。全国どこでも学校でおこなわれる地域学習といえば大概はそうしたものである。だが、考えてみればこの種の地域学習は本当の意味での地域学習になっているのかどうか。「学ばされ」と「学び」とでは天地ほどの違いがあろう。大人と子どもの関係を指導と被指導の関係、教えー教えられる関係で捉えていては地域活性化は成り立たない。子どもは未来を生きる存在だ。過去を生きてきた人間とこれから未来を生きる人間とが成熟ー未熟の関係を超えて、同じ目線で地域を捉えなおしてこそ地域活性化は生まれるのではないか。そういうことを考えさせられた。

実はこのことに一番早く気付いていたのはほかならぬ公民館の館長さんだったようだ。公民館は社会教育施設である。社会教育施設というのは地域住民の「学校」だ。「学校」というと先生（講師）が教えて生徒（受講者）が学ぶという構図を思い浮かべるかもしれないが、公民館は本来、住民同士が相互に学び合い教え合う学校である。これに小学校（そしてすぐ隣には中学校もある）を巻き込んで企画を立てているところに館長さんの教育者としての見識の高さが感じられる。こういう仕掛人の存在は地域にとって貴重だ。どうやらここの公民館にはこの手の仕掛け人（影の教育者）が館長さんを中心に数名おられるようで、なかなか魅力的である。

もう一点、私はこの 6 年生の子どもたちを指導した教師のことが非常に気になった。気になったというのは、その指導力の高さに驚いたからである。どのようにしてここまで子どもたちを指導することができたのだろうか。おそらく公民館長さんの申し入れを受けて、この教師自身、子どもたちとともに手探りで実践をおこなったことだろう。その手作り感が子どもたちを主役に押し出し、地域住民を引き付けているようにも思われる。とにかく発表会全体を通じて教師が一度も顔を出さなかったところに、この教師の姿勢が感じられた。

３．地域再生と教育

地域再生と教育を考えるうえで参考になる文献がいくつかある。その一つに、中央教育審議会答申『新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について』（平成 27 年 12 月）がある。平成 28 年改訂の学習指導要領にもこの答申の内容は反映されている。この答申は、こ

れからの国の基本方針を示しているからかなり重要だ。だが、学校教育を地方や地域の創生・再生と結びつける動きは今に始まったことではない。ずっと昔からある。1920～30 年代、やはり日本経済が大きく行き詰まり、地方の農村が人間関係（多くは地主小作関係）まで含めて大きく疲弊していく時代背景の中で、学校現場では「郷土教育」の展開があった。そして、戦時体制をはさんで 1950 年代には生活綴り方教育が戦後復興と民主主義国家建設の課題に応える形で、小中学生に作文教育を通じて自分たちの村の暮らしを見つめさせ、教科の学習を因襲的な村の暮らしからの解放（＝自由）に結びつけて展開していく教育実践が全国各地で試みられた。これは日本の学校と教師が積み上げてきた大きな教育遺産と言える。そうした遺産を代表する本の 1 冊に、無着成恭の『やまびこ学校』（1951 年）と並び称される東井義男の『村を育てる学力』（1957 年）という本がある。兵庫県北部の農村で長年教師を務めてきた著書が自身の実践（失敗も含む）を踏まえて書いた本である。

さて、私はこの本を実に何十年ぶりかで読み返してみた。率直に言って、同じく「地域と学校」をテーマにしているが、中教審答申と東井の著書とでは「地域」の捉え方も「学校」の捉え方もあまりにも違いが大きい。時代が違うと言ってしまえばそれまでだが、それだけでは済まない問題もあるように感じる。東井の本の冒頭にある「私たちの夢」と題する小学 6 年生による合作の詩を読むと、あの当時の片田舎の村が今では想像もできないほど、どんなに貧しくて陰湿な状態だったかがよくわかる。やがて経済の高度成長にともない、人々は東井の言う「村を捨てる学力」を身につけて都会に出ていき、代わりに村には「私たちの夢」だった自動車が走る舗装道路やコンクリートの橋ができ、電話は 100％普及し、トンネルができて村は直接外の世界につながり、土臭い肉体労働だった農業は機械化され、村落内の差別的人間関係は消えさった。だが、その代償は大きい。過疎化、少子高齢化、耕作放棄地、廃屋対策、限界集落、等々。若者を送り出し続けてきた村はついに来るところまできたという感じだ。はたして東井がめざした「村を育てる学力」は無力だったのだろうか。

近代化以前の「村を育てる学力」と、近代化が一巡してポスト近代（近代の終焉）が始まった今日の「地方創生」の教育と、どこが同じで、どこが違うのか。東井の「村を育てる学力」は子どもたちを村から出さない（村に縛り付けておく）ことをめざすものではなかった。むしろ、彼らが田舎のハンディを乗り越えて、都会の子らと対等に渡り合っていけるようにすることをめざしていた。当時は都市と農村の格差は、経済面でも、生活水準の面でも、子どもの学力の面でも、今よりずっと大きかったことが背景にある。「私たちの夢」を読んで、道路だ電話だトンネルだと、そんなことが「夢」だったんだと今の私たちは笑えるが、当時はそうではなかった。

教師が子どもに保証する学力は、普遍妥当性（汎用性）をもつ能力だ。学力自体に都会の学力と田舎の学力といった違いがあるわけではない。だから、「村を育てる学力」は「村を捨てる学力」へと容易に転嫁してしまう。教師が僻地の寒村の子どもたちにやっとの思いで身につけさせた学力は、やがて彼らを都会の学校へと向かわせていく。まさに自己矛盾だ。この自己矛盾を東井は「土への愛」によって解決しようとした。子どもたちに確かな郷土愛（地域への愛着）を育むことができれば、たとえ村を出ていっても、彼らが村を「捨てる」ことにはならないだろうというのが彼の解決策だった。だが、2020 年の今の村の現状を見て、はたしてそれが真に「村を育てる学力」だったと言えるのかどうか。

私は東井義男が間違っていたと言うつもりは毛頭ない。むしろ彼の実践は正しかったと思う。正しかったというのは、彼の言う「教科の論理」（合理的な知識や概念がもつ科学的な論理性）を「生活の論理」（身体感覚と結びついた生活経験の論理）と結びつけ、それによって「主体的な学習」の方法を彼が実践していた点である。言い換えれば、教科書の知識を教科書の知識のままに教えるのではなく、いったん子ども自身の生活経験（村の生活）のレベルに引き下ろして、そこから概念や論理を我がものとして学び取っていくような授業展開を考え出し実践した点である。

だが、同時に気になる点がある。彼が村の子どもたちを救済の対象と見ているその眼差しである。確かに師範学校出の東井先生は村一番の知識人だった。外の世界を知らず、児童労働のかたわらかろうじて学校に来ている子どもたちを前にして、昭和のあの時代、心ある教師なら、だれでも福音伝道の救済者にならざるを得なかっただろう。まさにこれから近代化に向かう時代の教師像と言えよう。彼の眼には村の現状は前近代そのものに映っていた。だが、教師のこの眼差しが「村を育てる学力」を「村を捨てる学力」に転化させてしまっていたのではないのか。これは東井の責任ではない。近代化が一巡し、ポスト近代を迎えた今日の私たちが引き受けなければならない問題だ。

教育にとって「近代」とは何か、何であったのか。これは同時に、地域にとって「近代」とは何か、何であったのかを考えることと同じであろう。そうした動きは「中央」目線では見えないところで既に始まっているのかもしれない。行政が唱える「地方創生」はあくまでも「中央」に対する「地方」の創生でしかない。そういう目線からでは見えない地域の現実を一つ一つ丁寧に見つめることが今とても大切なのではなかろうか。